「春日村」の淨瑠璃に就いて

千葉胤男

「……儲此度未熟の身ながら初役として「競伊勢物語」を相語り可申御存知の大物にて是迄數度御勸めに預り候へ共中々大役と辭退いたし居り候處これにては修業にあらずと達てのお勸めにより縣命に相つとめ可申云々

月　日　　竹本越路太夫敬白」

大正五年六月御靈の文樂座に於て中狂言として「競伊勢物語」が玉水淵より「春日村の段」迄上演された時の越路の口上書―番付面―である。斯道では、「忠九」、「日向島」並に此の「伊勢物語」の「三ノ切春日村」の段を三大物と稱して大變重い語物として取扱はれてゐる。「忠九」、「日向島」に就いては、その初演年月日、作者、作曲者はもとよりの事、其の他の事柄に至る迄研究されてゐるようである。それは、「日向島」にしろ、「忠九」にしろ、操が本家で、歌舞伎は、それを移したのである故、國劇として歌舞伎檢討の盛んな今日、原作の淨瑠璃の方も亦從つて研究されるに致つた。「春日村」は逆に、歌舞伎の方がもとであるから、義太夫の方は歌舞伎が大に當つたので、それに刺激されて手摺にかけた謂はゞ分家分なので、本家の歌舞伎としての「春日村」は充分に知られ色々研究されて居るも、義太夫としてはその曲が所謂三大物の一であるにも係はらず、義太夫としての初演年月日、作者、太夫、初演座等に於ては、一向、世人に注意を拂はれて居らぬようである。

安永四年四月大阪中ノ芝居に、當時の上方劇壇、作者の重鎭たる奈河亀助が元祖中村歌右衛門の爲に書卸した事は人の知る所である。

「伊賀越乘掛合羽」、「殿下茶屋聚」、「加賀見山廓寫本」、「伽羅先代萩」等と同じく此の作者の當り狂言であつた。「殿下茶屋」、「乘掛合羽」、「廓寫本」、「先代」は後に云ふ「讀本上るり」としては出板せられなかつた。もつとも以上の四作共――歌舞伎と操と、多少の差は勿論あるが亀助の原作に胚胎せしは明白である――操座でいづれも上演され、その時に丸本は發行せられた。餘談にわたるが、「乘掛合羽」は「圓

覺寺」が最知られ「般若坂」「木辻」等も殘り、近松半二の「道中双六」と題材が同じ爲に、「乘掛合羽道中双六伊賀越」として通狂言として今日に及び、「廓寫本」も「花若切腹」等が殘り七ツ目切「又助住家」が殊に名高く、尾上岩藤の「舊錦繪」と混じてこれ亦通し狂言となり、通しの時は「加賀見山舊錦繪」の外題を多く使ひ、「又助」一段の時は「廓寫本」の原名を使ひ、「先代萩」に於ては、餘りに名高き語物である故今更說く所もなからう。「殿下茶屋」とても、委しい事は省略するが「報春住吉」――丸本の題簽だけは「報春殿下茶屋」としたのもあり、斯くある本の方が、題簽にも「春住吉」とあるよりも初板本と思はれる。――と改題され、嘉永三年七月再版の「通本淨瑠璃外題目錄」には、「天下茶屋敵討　人形屋の段」とあるのは、此の「春住吉」の「七ツ目、人形屋幸右衛門内の段」の事と推定されるが五行本が未見なので、何とも申されないが、兎もあれ操に取入れた事は事實である。

さて、此の「競伊勢物語」のみは、歌舞伎上演後、全篇を上下二冊五段に分けて、「讀本上るり」として上梓せられ、その前序に、

「――故人妙作の文を借りまじへ木に竹をつぎ〳〵五段の綺語をあらはす是なん扮人擬語の稿とも又は淨瑠璃に似ものとやいはんよつて此の道の數寄者足らざるを增し多をはぶき宜曲節而各其の妙音にのせ語り給はらば劇場に勢ひを增すの本望ならんかしとひたすら一座の勸めに應じ所詮予が管見短才を梓にてらして御笑ひを申請るものならし

安永四乙未年孟夏日　　狂言作者遊泥居識　奈河亀助

とある。想ふに、彼れ亀助としては非常な會心の作である事を親ひ知り得る。讀本上るりであるが爲に節付は凡どなく――三重、歌の類極く僅ばかりあるも――全くの素本である。歌舞伎狂言が當つて、それが筋書、根本とは別に、讀本上るり本（丸本）として出板された例は餘りなく、享保以前は措き此の前後に於いては、先例として、寶曆七年四月六日、大阪大西芝居に興行せられた並木正三等の作「四天王寺伽藍鑑」がある。此の方は、全篇五段を普通の丸本と同じく、一冊物で、節付も細くあり、全べて、普通の丸本と樣式が同じである。「讀本上るり」と「外題年鑑」等に稱されて居る一類の丸本は、節付の無い素本が當然と思はれるに、此の「伽藍鑑」や「誓義士三人治郎」（明和四年六月、夏炉安作、竹本染太夫、同鐘太夫等の節付連名有り）、福内鬼外（平賀源内）の例の「褥合戰」等に斯く節付があるのは一考を要し、檢討を必要とするも別の機會に讓り、今は讀本上るりにも節付があるのも存するという事だけを述べて置くに止める。後例とし

ては、寛政五年十月に出板せられた、「忠臣双葉藏」があるだけで、「伊勢物語」同様上下二冊の素本で、邦樂年表義太夫節の解説には、大阪中座の本年の顔見世とあるも、聊不審なので奥書等を掲げておく。

「右双葉藏の狂言者京大坂に而大當りをし歌舞伎狂言の趣向を添削して新に淨瑠璃之讀本となす猶節付は己〳〵が得手勝手に章を附よと云事しかり」。

とあり、役人替名には　大星宮内、由良之助、尾上新七。天川屋儀平、三桝大五郎。其他、山村儀右衛門。吾妻藤藏の名が見えて居る。こんな工合で「讀本上るり」に出板せられたのは餘程の當り狂言に限られた事が分る。

亀助が「競伊勢物語」を書卸したのが前述の如く、安永四年四月で、操の方の上演を希望して「讀本上るり」を出板したのが、孟夏で（七月頃）その年の八月十二日に、京の都万太夫座に於て、當時の錚々たる太夫　豊竹島太夫（二代目豊竹若太夫）と「妹脊山」の「山掛合」で御馴染の竹本春太夫との二人紋下で、「大和に筒井里　河内に生駒山　競伊勢物語」と歌舞伎その儘の外題で演じた。操りでの初めての試みであつた。此の時の丸本であらうか、同日附の記した普通様式の丸本が傳存してゐる。但しその外題は、「増補伊勢物語」とある。丸本として發行するに、前の讀本上るりの「競伊勢物語」があるので増補の二字を冠らせたのであらふ。番付にも、丸本にも増補者の名は記るしてない。　高野氏の淨瑠璃史の年表には作者遊泥居（亀助）とあり、一覽した「増補伊勢物語」の中には、墨で外題の下に、「奈河亀助」と書入した本もあるも、確證の出ぬ限り、増補者は不明であると云つても差支へなからう。「増補女舞劍紅楓」「増補道具屋お亀」（糸櫻本町育を上方風に、人名地名を改作した作）の類にも増補者の名を記るしてないのは原作者に對して遠慮した爲であらふ。

此の「伊勢物語」の増補作は、仕組に於ては全く、同一であり、文句とても凡んど同じで、義太夫の「鳴渡」や「梅由」を富本、常磐津、新内等で語る際に、やをそに改めた程度である。讀本上るりの儘では語り難いので文句に手を入れたにすぎない。太夫側の注文であらうか。太夫の役割は、肝心の三段目のみに就いて記るすと

口	豊竹繁太夫	
次	同	三好太夫
中	同	粂太夫
切	同	島太夫

である。丸本によつて比較してみると、「口」というのは玉水の茶屋より池迄で、「次」は、春日村の初めより、鐃八のゆすり迄、「中」が「はつたい茶」の件り、「切」が信夫の戻りより段切迄である。切を語つた「島太夫」というのは元文四年四月竹本座「ひらがな盛衰記」が初舞臺で竹本志摩

太夫と名乗り、大津宿屋より笹引迄を勤め、爾後寛延元年八月「忠臣藏」迄　竹本座に出演、延享元年に志摩の字を島と改め、寛延元年十一月より、豊竹島太夫名で豊竹座に出勤し寛延三年八月和田合戦の再演の時二代目若太夫を襲名、明和元年に同座を退座し、明和三年正月竹本座、本朝廿四孝に舊名竹本島太夫名で出勤、明和五年九月「初櫓操目錄」(寄せ物)で同座の紋下となりしも直きに退座せしものと見え、明和六年八月一日に、竹豊合併の「殿造千丈嶽」の紋下豊竹島太夫名で出演し、明けて七年、豊竹座再興、同紋下となり、安永四年四月同座に於て一世一代、菅原の再演を勤め、同八月十二日に京の此の「伊勢物語」三ノ切の出演は、島太夫の京都に於ける一世一代の演し物とも考へられる。其の後、京坂にはその名が見當らずして、安永八、九の兩年には江戸に其の名が見え、天明元年より病氣の爲に休座、同四年九月十日に歿した。享年は未詳である。彼れ島太夫事、二代目若太夫の語口に關しては「竹豊故事」等に評語があり、又今日に殘る曲目も相當あるが、全般に渉るのは避けて、「春日村」の參考迄に極く代表的なのを若干掲げてみる。

盛衰記　笹引き　夏祭六ツ目燒ごて

菅　原　寺子屋　忠　六

六三(おそのかしく)新屋敷　信仰記三ノ切

祇園女御三ノ切(お柳別の原作)　岸姫三ノ切

廿四孝　勘助内　伊勢物語三ノ切

阿波の鳴門八ツ目　迎駕籠　聚樂町

三勝半七酒屋の段　白石四ツ目田植の段

釜淵の釜入(再演物)　小栗判官三ノ切(同上)

大體、島太夫の藝風は分り得ると思ふ。

此の島太夫連中の京の「伊勢物語」は相當に當つたと見えて、大阪の北堀江座で上演されたと見えて繪盡が現存してゐる。外題年鑑、邦樂年表等には全然北堀江座に於ける上演の記事が見當らない。合憎と年代が記るしてない。表紙には、「競伊勢物語　全部五冊物　座本豊竹此吉」とあり、初丁の始めに、座本豊竹此吉、太夫豊竹若太夫。名代豊竹此太夫とある。同形式の繪盡では、安永四年正月二十九日の「軍術出口柳」、同年九月の「倭歌月見松」、同五年の「鯛屋貞柳歳旦開」「三國無双奴請狀」「桂川連理柵」等、六年の「伊賀越乘掛合羽」、七年の「御堂前菖蒲帷子」は座本、太夫、名代の樣式で、前記三名である。安永八年の「近江國源五郎鮒」、九年の「東山殿幼稚物語」、天明の「鎌倉三代記」(江戸初演、北堀江座で再演す)、「合詞(あいことば)四十七文字」等になると、「繪盡」には太夫、名代の名が抹消されて座本豊竹此吉とのみある。夫故、北堀江座で上演したのは、安永四年末より同七年の間ではなからうか。座付の豊竹此太夫——此吉座の紋下太夫で、合邦内、質店、大文字屋を語り始む。——太功記で名

高い麓太夫等の連中が語つたものと思ふ。

昭和六年九月に、東京帝劇に於いて、豊竹古靱太夫等に依つて、「競伊勢物語」が中狂言として語られた。言ふ迄も無く、三段目だけ、即ち、玉水より春日村の段迄であつた。「玉水」と春日村の口と中は「増補競伊勢物語」と文句は同一であるも、古靱の語つた「切」の一段は筋立はさして異ならないも、文句が簡單になり、雅でない。聞く所に依ると五行本によつたという事である。幸ひな事に五行本の表紙には竹本土佐太夫、絃鶴澤寛治の連名がのつてゐる。「邦樂年表」の「伊勢物語」の項をくつてみると、島太夫のを初演と見、此吉座のは記載なく、その次の文化八年七月大西芝居に前狂言として、大序より三段目迄上演してゐる。三段目は「口」が錦太夫、「切ノ口」が鐘太夫、「中」が染太夫で「切」が竹本土佐太夫で、三味線の立三味線は鶴澤寛治である。してみると、現行の「春日村の段」は委しく云へば切の一段は、從來の通説、文樂座發行の筋書には、何時頃のものか分らぬとあるが、文化八年の此の時を初演と見、節付は土佐太夫、寛治で、文者は不明と見なす。「玉水」や、「春日村」の口、中は、安永四年七月通りのが現在語られて居るから推すと、――唯しこれは文句の事で、語口、三味線の手、人形の型は當時の儘とはいへぬも――島太夫のが餘りにも丁場が長過るやうに思へたので、刈込で今日に殘る曲にしたのであらう。

此の「春日村」は土佐太夫の口に合つたものか、文化十年に中狂言として三段目だけを、――爾後三段目のみ語られて今日に來てゐる――文政九年には播磨大掾の名で語り、前後通じて三度勤めた。して文政十二年十二月に土佐太夫事播磨大掾は歿した。

此の淨瑠璃の外題「競伊勢物語」の競の字の讀方に後年色々の説があるが、これは大序の段切よりきてゐる。亀助の讀本上るり(シウ)も増補の丸本も同文である。引用してみると、

地色(中ウ)「イザ退出と立別るゝ心々の雲の上。空位も頓(やが)て實を結ぶ(ウ)ギン梅と櫻の競盛(はなくらべ)り爭ふ大内山。春の日脚(あしウ)も長き代の。例を。(ウたしユリ)引も三重〳〵豊なれ。

競の字は「はなくらべ」と讀むのが正當で、年表に依ると番付にも斯くあり。とあり、此吉座の繪盡にも「はなくらべ」と振假名がついてある。競の一字で斯く讀ますのは一寸無理な樣であるが、花競とすると六字外題になるから忌んだ爲で競一字で「伊勢物語」の上に据えたものであらう。後年、大序が出ず、三段目ばかりなので讀方も色々になり、「だてくらべ」「くらべどし」、「ふたつがしら」なぞと讀まれるに到つた。「春日村の段」の別名としては、「小よし住家の段」と云ふ事がある。義太夫では、曲によると段名が色々に呼ばれる「政岡忠義」が「御殿」、「妹脊山」の「金殿」が「竹に雀の段」「寺子屋」が「松王首實驗」、又、安達三は「神萩祭文」が普通なのに、端場の敷妙使者、矢の根の件なき時でも「環宮空御殿の段」と呼ぶ事がある。此の呼び方の方が好ましい。舞臺

は御承知の宮殿で雪が降つてゐる。人形は居ない。袖萩の出が靜に語られる。「祭文の段」と呼ぶよりも情趣がある。

「玉水の段」の殺生禁斷は、「阿漕浦」を聯想させる。「小よし住家」一トロに云へば身代り物である。娘の母にあたる所も、死ぬ前に髪を結ひなほす所も別に目新らしいとはいへない。彼の「伊勢物語」の文や和歌を、綴込んであるが爲に土佐太夫の改作のものでも、古雅な情緒を醸し出される。「春日村」は、「春日の里」と、「伊勢物語」にあるより思付いたものらしく、陸奥の事、信夫摺の事は、該書の和歌などから暗示を得たものであらう。人物としての、紀有常、信夫齋宮、磯の上、豆四郎は、かの豆男の轉化で、いづれも伊勢物語に緣の深い語である。はつたい茶の段は、端場でも時代と世話の變り目のある、至難の語場と稱されてゐる。渡海屋の知盛出陣の件りも時代、世話の變りの至難の曲と稱されるもこの方は事件があるから、鮮に變るも、公家侍の有常が、昔の浪人の氣分になつて、人形は公家侍の頭に手拭を被る、小よしと昔語りをする、世話にくだける方が骨の折るように思へる。はつたい茶と云うのは文中に「――前方の禮も云はうと思ひの外、はつたいにならしやつた、そんなら志じや食べまする」とあるから名付けた段名である。麥焦しの事で、小よしの連合の供養に、小よしが有常に出したからである「春日村」の口で小よしの唄ふ「こいといふた迚行るゝ道か。道は四十五里浪の上」は、伊賀八の岡崎で、老母の、「云て引出す糸車。唄こいと云ふたとて行かれる道か。道は四十五里波の上」と糸くりを廻しながらの唄と同一で、双方共に老婆の唄であるのが面白い。身代りに信夫の髪衣裳を御所風に改めるのは、岸姫松、妹脊山等に、別れに琴唄、又、鋏八の片袖のかたり、信夫の母にわざとすねる件り等は在來の趣向で別に目新らしくはないも、手際よく書かれてゐるので今に到る迄、大物として傳存し斯道では珍重してゐる。尙、信夫と豆四郎との靈の道行が大切として、「春日村」の次に上演された事も稀にはあるが、亀助のにも、增補の丸本のにも、斯かる道行はない。案ずるに、此の道行「妹脊鳥草花のたはむれ」は、助國蝶の道行よりの脫化であらう。「伊勢物語」を切に据ると、「春日村」では終末が淋しいので添えたまでゞあらう。

「競伊勢物語」一篇の詩趣のある趣向は、亀助の功ではあるが、義太夫として、「小よし住家」の切の一段が、御存知の大物と斷書の附く程の語物として持映るに致つたのは、安永の島太夫より、土佐太夫、寛治兩人の力多しとせねばならぬであらう。

（昭和十七年四月二十二日）

安永四年四月五日	競伊勢物語	中芝居（歌舞伎）
安永四年孟夏日	競伊勢物語	奈河亀助　讀本上るり出板
安永四年八月十三日	競伊勢物語	京万太夫　三ノ切島太夫　「增補競伊勢物語」の丸本出板
安永？	競伊勢物語	座本豊竹　此吉　太夫豊竹若太夫　繪盡、傳存
文化八、七月	競伊勢物語	名代豊竹此太夫
	競伊勢物語	大序より三段目迄五行本ノ表紙　三ノ切土佐太夫　土佐太夫寛治記載